4
神のみ旨とクリスマス

きょうはクリスマスで、世界中の人々が、イエス・キリストの御聖誕をお祝いしています。イエス様のことを考えてみるとき、私たちは、イエス様が普通の人間と同じように個人的目的で誕生されたのではなく、世界を救うために、この地上に来られたことが分かります。堕落のゆえに、人類は神のもとに帰るために、明らかに救い主を必要としています。人類は、神から遠く離れており、すべての人は、神のもとに帰るために、イエス様を通過しなければならないのです。

2000年前のイエス・キリストの来臨の目的を知ることが、クリスマスのこの日を祝うことにおいて、最も重要なことです。その目的をはっきりと知らなければ、このお祝いは意味がないので、けさ私は、「神のみ旨とクリスマス」という題目で、説教をしたいと思います。

この世界に対する神の最初の意図が完全に成就されたかどうかを尋ねてみるときに、明らかな回答は、いいえです。神のみ旨は、堕落のゆえに最初から阻止されたのです。歴史を通して、堕落した人類は、神のみ

旨と創造目的の最終的な成就を求め続けてきたのです。この神の摂理が、個人、家庭、社会、国家、世界と多くの違った段階に進んできたように、神の最初のみ旨、青写真は決して変わらなかったのです。

神は、永遠、不変、絶対であり、唯一無二の存在です。それゆえ、神のみ旨もまた、永遠、不変、絶対であり、唯一無二なのです。神は、人間が失敗したからといって、御自身の最初の基準を妥協することはできません。神は、罪深い人間のレベルまで下りてくることはできないのです。人間のほうが、神のレベルにまで上がっていかなければならないのです。

イエス様は地上天国を実現するために来られた

堕落以来、神のみ旨は、復帰の目的に焦点を合わせてきました。神は、人類を救済する決意をされ、どうやって堕落の状態から脱出し、本然の創造理想に戻っていくかを人々に示されました。それが、復帰、すなわち救いの摂理なのです。歴史を通して、人間は自分自身を救済する立場にはありませんでした。その代わり、救いは神から来るのです。神は、世界に神の本然の創造理想を示すために、救世主を送らなければなりません。その方が、イエス・キリストだったのです。

御存じのように、神のこの世界に対する最初の意図は、個人の完成ばかりでなく、家庭の完成をももたらすことでした。それは、氏族、社会、国家、世界の完成へと拡大したことでしょう。アダムとエバが堕落しないで完成していたならば、今日の世界は全く違っていたことでしょう。私たちは、毎日目撃する忌まわしい光景を、全く見ることはなかったでしょう。また、人々を分裂させている言語の障壁や国家の壁を見ることもなかったでしょう。さらに、一人一人は、実際に完成に到達するために生きるでしょうし、最終的な神の国に到達するために、自分自身の生

き方を明確に計画することもできるでしょう。今日の問題は、人間が生きておられる神を知らないことであり、適切な方向性が欠如していることです。人々は、でたらめで逸脱した生活を送っているのです。本然の理想世界では、このようなことは決してないでしょう。すべての人が、神のみ意に完全に同一方向にある完成へと導かれ、また、だれも神のみ意から外れて生きたいと思うことはできないし、思いもしないでしょう。

もし、堕落がなかったならば、人類は地上天国の市民になっていたはずです。神の国の市民は、この地上で自分の人生を出発し、この地上での生涯を終えたのちは、自動的に天上天国に上がっていき、そしてそこで、彼らは家族として存続することでしょう。

神の心の中には、常に青写真があり、それは、たとえこれらの計画が今まで現実的に実現されたことがなかったとしても、今まで常にあり、これからも完全なまま残るであろう、神の最初の御計画なのです。イエス様は、「御国がきますように。みこころが天に行われるとおり、地にも行われますように」と祈られました。イエス様は、天での神のみ意の完全性を御存じであられ、この地上に完全なるものを築くために来られ、地上にそのみ意をもたらされたのです。それが、神の御計画だったのです。

生けるイエス様は
救いの完全な仲保者だった

イエス・キリストは、神のみ旨のために、すなわちイスラエルという選民国家に神のみ旨を伝播するために来られたのです。神はある方向に向かっておられ、イエス・キリストは、その方向と一致して動いておられたので、明らかにイスラエルの人々は、イエス様と同一方向に動くことになっていたはずです。もしこれらの三者がすべて、一つの方向に向かって動いていたならば、神の究極的み旨はその国家で成就していたことでしょう。神とイエス様は一体化し、必要とされていたすべてのことは、イスラエルの民をイエス様と一つにすることだったのです。国家的レベルで成就したのちには、その成就が世界的レベルにまで拡大するこ

とは、確実だったでしょう。

イエス様は、聖職者としてイスラエルの民に受け入れられるためにやって来られました。イエス様は、エデンの園の復帰の条件を満たすための大きな機会をもたらされたのです。エデンの園ですべてのものが失われましたが、もしイスラエル選民がメシヤと一体化していたならば、イスラエルという選民国家によって、すべてのものが復帰されていたことでしょう。イエス様が現れたのち、何世紀もの間起きた流血の闘争は決してあってはならなかったのです。神は、メシヤ出現の時に、そのメシヤを受け入れる用意をするために、何千年もの間イスラエルを準備されたのです。イエス様は、当時の大部分のユダヤ人たちが期待していたような現れ方をしませんでしたが、メシヤ来臨の時には、なおもメシヤを受け入れ、メシヤと共に働く知恵をもつべきだったのです。それゆえ、洗礼ヨハネはイエス様のために道を整えて、世界に向かって、「悔い改めよ、天国は近づいた」と宣言したのです。イエス様も、最初の言葉で「悔い改めよ、天国は近づいた」と同じ警告を繰り返されたのです。

メシヤは、神の心情を理解でき、また論ずることができたので、神の愛と一体となることができたのです。イエス様のまれに見る人間的資質は、御自分をしてイスラエル民族にかかわりをもたせることができたのです。イエス様は、神と全堕落世界との架け橋であり、イエス様を受け入れることによって人々は、神を受け入れ、神と一つになっていたことでしょう。神のみ旨は、メシヤを受け入れることであり、拒絶することではなかったのです。イエス様は、本当にメシヤだったのであり、人々が完全に従うことを通して、イエス様には、イスラエルを指導すべき力が与えられていたはずでした。

イエス様の死は、自殺ではなかったのです。それは処刑だったのです。今日、キリスト教の教義では、イエス様の血による救いを説いています。しかし、神とイエス様に、この教義に賛成かどうかを問うてみなければならないのです。聖書には、死を宣告されて今にも石を投げられようとしていた売春婦の話が記録されています。彼女の周りに集っていた人々

に、イエス様は「あなたがたの中で罪のない者が、まずこの女に石を投げつけるがよい」と言われたのです。すると、すべての者は人目を気にしながら、自分の持っていた石を捨てました。皆が恥ずかしく思いながら去ったのちに、イエス様はその罪を問われた女性に話しかけて、「あなたを罰する者はなかったのか。わたしもあなたを罰しない。お帰りなさい、今後はもう罪を犯さないように」と言われたのです。これは、何を意味しているのでしょうか？　イエス様は、御自身の言葉によって、許しを与えたのです。イエス様が、一滴の血を流す前においてさえも、既に救いはあったのです。だれも、イエス様の死を待つ必要はなかったのです。イエス様の言葉を受け入れるならば、救いがあったのです。それは、聖書の中にあるのです。イエス様は、「あなたを許し、救ってあげましょう。でも、私が十字架で死ぬまで待っていなさい」と言(ことば)って、引換券を与えたりはされなかったのです。イエス様は、神のみ言によって、すべての人々に救いを与えられたのです。神の救いの御計画は、流血を必要とされなかったのです。救いという言葉は、生きた男性と女性、そして家族が共にいるエデンの園が、この地上に実現されることを意味しているのです。私たちに必要なのは、生きて完成することであり、流血や死ではないのです。

アダム、イエス様、再臨主は
同じ目的のために存在する

しかし、イエス・キリストの来臨後でさえも、いまだ神はこの地上に、御自身の本然の計画が完成されたのを見ておられないのです。十字架のゆえにイエス様は、エデンの園の理想の実現という、御自分の来臨の目的を完全に果たすことができなかったのです。メシヤを殺害することによって理想を完成することなど、神の最初の御計画では全くなかったのです。もしそれが本当に神のなされ方であるならば、イエス様を理解する準備のできていない国にただ送れば、十分だったでしょう。犠牲というのは、時には必要ですが、しかし、神は救いを完成するための鍵として、人間の命を犠牲にしようとは意図されなかったのです。十字架のゆえにイエス・キリストは、人類に、完璧な個人完成、あるいは家庭、社

会、国家の完成をもたらすことができませんでした。したがって、メシヤがもう一度来られなければならないというのは、最も理論的なことなのです。

イエス来臨の時、イエス様は何をされるのでしょうか？　世界を一掃するために来られるのでしょうか？　「裁き」という言葉は、神が憤って、すべてのものを一掃されることを意味すると、しばしば誤解されています。それは、メシヤが再び来られる目的ではありません。その全目的は、2000年前にやり残した使命を成就することであり、個人、家庭、社会、国家、世界の完成のために働くことなのです。裁きとは、この地上に神の国が完成するのを見るための、神の建設的なみ業なのです。

神のみ業は、現実的で有形のものです。聖書を文字どおり解釈することによって、多くのクリスチャンたちは、イエス様が空から現れると予想していますが、この観点にはいくつかの問題があります。人々は、神を超自然的存在、すなわちイエス様を雲の上から来臨させるという奇跡さえも起こすことのできるお方であると理解しているのです。しかしその場合、なぜキリスト教が必要なのでしょうか？　なぜ信仰が必要なのでしょうか？　神はなぜ、最初から神の国をつくるために超自然的な力を使われなかったのでしょうか？　なぜ神は、このことを成就するために、6000年間待たなければならなかったのでしょうか？

私は皆さんに、2000年前にイエス様を送られた神の意図は、エデンの園にアダムが来たことと、全く同じであることを知っていただきたいのです。再臨主は、同じ目的のために来られるのです。言葉を換えて言うならば、神のみ旨、アダムの目的、イエス様の目的、そして再臨主の目的は、みな同じなのです。真実は不変であり、始めであり終わりであるのです。神のみ旨は、変わることも、時が過ぎて色あせることもなく、永遠に同じなのです。神は一つの公式をもっておられ、その公式が成就されるときには、神はそれに調印されるでしょう。その特定の公式は、いまだ果たされないままで残っているのです。神は、人間がその純粋で本物の基準を成就することを待っておられるのです。

イエス様は、真の人間であり、神と一体である

真の人間とは、いったい何でしょうか？　アメリカ合衆国の大統領は、自動的に真の人間でしょうか？　真の人間とは、神の枠組みに完全に適合している人であり、神が丸ければ、その真の人間は完全に丸いし、神が四角であれば、その真の人間は完全に四角だということを意味しているのです。昼から夜まで、永遠から永遠まで、真の人間はその基準から外れないでしょう。

私たちは、どのようにしてイエス様が真の人間であったと分かるのでしょうか？　イエス様は、自分の額に大きな印を書いたわけでも、博士号を取ったわけでもありません。イエス様は、並外れて大きかったわけでも、そのような力をもっていたわけでもありません。私たちは、どうしてイエス様が真の人間であったということが分かるのでしょうか？イエス様の生き方が、神のみ旨の方向と一致しており、神の生き方に完全に適合していたので、私たちは、イエス様が真の人間であったことが分かるのです。私たちは、イエス様がただ神のみ旨のためにのみ生まれ、ただ神のみ旨のためにのみ生き、ただ神のみ旨のためにのみ亡くなられたということを知っています。イエス様の十字架上での死の決定的瞬間に、イエス様は、メシヤとして、メシヤの尊厳をもって亡くなられたのであって、普通の人として、悲しい人として、または身を隠すために亡くなられたのではありません。イエス様は、御自分が人々を救おうとしてなしてきた努力に対してかたくなに反対する人々に対して憤ることによって、神のみ旨をあきらめるわけにはいかなかったのです。「たとえ今ローマ帝国が私に反対したとしても、それは私の慈悲を受けるであろう。たとえユダヤ人が、私に反対するとしても、彼らは私の憐れみを受けるであろう」と、イエス様は深く感じておられたのです。それゆえ、イエス様には彼らを許す余裕があり、彼らのために祈り、彼らを抱擁する余裕があったのです。

イエス様は、完全に神の生涯を歩まれたので、真の人間だったのです。イエス様は、生ける神でした。神とイエス様の間には何の分離もなく、だれも神を破壊することはできないので、だれもイエス・キリストを破壊することはできないのです。十字架はイエス様の滅亡ではなかったのです。世界の人々が、イエス様は決して滅びはしなかったことが分かる

ように、神は復活の力を現されたのです。

メシヤを受け入れるためには どのような姿勢が必要なのか？

イスラエルで完成が成就されなかったので、神は、第二イスラエルとして、すなわち再臨のメシヤが来臨できる基台として、キリスト教を準備されたのです。その基台をつくることが、キリスト教の課題なのです。世界中のクリスチャンの最終的目標は、メシヤを受け入れることです。多くのクリスチャンは、メシヤが、瞬時のうちに世界のすべての問題を解決し、即座に世界を神の国にする、考えられなような奇跡が起こるように命令されるだろうと考えているのです。これは、クリスチャンたちの曖昧（あいまい）な理解であり、それはおそらくそうではないでしょう。

メシヤが再び来られるときには、正に人間として最低の立場から出発され、神の国の一番高い位置にまで、一歩一歩前進されることでしょう。その方は、世界のすべての人々が従うべきパターンをもたらし、世界に妥協されないでしょう。その方は、善と悪の最終的決着をつけ始められるでしょう。現代のクリスチャンたちは、神の本然の基準に従って、完全な男性と女性として、天上天国にまで引き上げられる準備ができているでしょうか？　全くそうではありません。彼らは、自分自身を変革しなければならず、メシヤのもたらすパターンに合うように、変わらなければならないのです。第二イスラエルとしてクリスチャンたちは、その模範へと自分自身を変えるべき、最初の人であるはずなのです。

多くのクリスチャンは、キリストが雲の上に乗って再臨されるのを、かたくなに待ち続けています。もし、キリストがおそらくパラシュートを着けて、雲に乗って来られるならば、疑いもなくメシヤと分かり、あがめられるでしょう。しかし、メシヤが雲の上に乗って来られるのではなく、普通の人として現れるという可能性は、全くないのでしょうか？

結局は、どのようなメシヤを人類は必要としているのでしょうか？　超自然的で、事実上非人間的存在として、雲から降りて来る人でしょうか？　それとも、私たちと同じ肉体と心をもった、私たちのうちの一人のような方でしょうか？　間違いなく人々は、キリストの立場で関係を結ぶことができる、実際の人間を必要としています。

イエス様は、御自身を「道であり、真理であり、命である」と言われました。イエス様がどんな方法で世界に来られても、実際何の違いもなかったのです――たとえ雲の上に乗って来られたとしても、雲は道でも真理でも命でもないのです。重要なのは、イエス様御自身であって、他の何ものでもないのです。たとえどのような方法でこの世に来られたとしても、イエス様は明確に、生きるべき道、人類のための真理、そしてどのようにして命を得るかを教えられたのです。また、イエス様は、「愛」そのものでした。イエス様はそう言われませんでしたが、彼は世界に対する神の愛の実体だったのです。

人類は、雲に乗って劇的に来られ、何も教えることがなく、イエス様がそうであったのとは全く違うメシヤを受け入れたいのでしょうか、それとも、普通に来られるけれども、あのように貴重な理解をもたらすことのできるメシヤを受け入れたいのでしょうか？　明らかに人類は、後者のようなメシヤに価値を置くことでしょう。

皆さんは、どれくらいよく神のみ旨について知っているのでしょうか？　多くのクリスチャンたちは、自分たちにとっての神のみ旨とは、自分自身の一握りの天国だけを探すことであると確信しており、自分以外の世界の人たちの運命については、より少ししか関心をもつことができないのです。国家や世界が滅びつつあるのに、責任を感じる代わりに、彼らは神がすべて何とかしてくれることを期待しているのです。それは、本当のキリスト教ではありません。

皆さんにはっきりと知っていただきたいことは、神とイエス様の標的は、世界であって、単に一個人、一人種、一民族、あるいは一国家ではないということです。神は、メシヤが完成を成就することを意図されたのであり、多数の教派をつくることを意図されたのではないのです。神はいまだに、完成という究極的目的と人々の一体化に到達しようと、決

意しておられるのです。分裂し争っているキリスト教が、どのようにしてイエス様の理想を具現化できるというのでしょうか？

私は、霊界で神の国がどのようなものであるのかを見たことがありますが、究極的には皆さんもまた、神の国は、宗教がここでそうであるのと同じように、分裂した状態で組織されてはいないということが分かるでしょう。このような分裂は、本当に神の願いに反するものです。宗教人の紛争と分裂は、霊界にまで持ち込まれ、神に悲しみをもたらしているのです。しかしながら、それが伝統的な信仰であったのです。

どのようにしてキリストの真の息子、娘になることができるか？

私たちは、イエス・キリストを救い主、メシヤと信じています。なぜならば、私たちもまた、神のみ旨を果たすことのできる息子、娘になりたいと思っているからです。イエス様は、使命のゆえに亡くなられたのであり、ただ御自分の天国を得るために亡くなられたのではありません。ですから、自分自身の天国を決して心配することなく、自分の社会やこの世界に神の国をもたらすことを心配してください。もし、皆さんがそのような姿勢であるならば、神に、「私は、天国に行きたいと思いません」と言うときに、神が皆さんのあとを追いかけ、個人的に皆さんを神の国の最高の位置につけることでしょう。

イエス様は、救うために御自分が送られた正にその人々の反逆について、神に決して不平を言われませんでしたし、その人々のことを心配するのを決してやめられませんでした。それは、イエス様の心情ではなかったのです。イエス様は、御自分の使命が、ただイスラエルの救いだけではなく、世界の救いであることを明確に知っておられたのです。イエス様は、神の息子として、み意（こころ）と心情において神と完全に一体となっておられたのです。その一体化のゆえに、イエス・キリストは喜んで、世界の人たちのために亡くなることができたのです。

どのようにすれば、皆さんはキリストの真の息子、娘になることができるのでしょうか？　イエス・キリストと完全に一つになることによって、イエス様の霊と一つになることによって、そして精神と心情と一つになることによってできるのです。もし、皆さんが完全にイエス・キリストと一つであるならば、世界の救いのために、喜んで犠牲になること

ができるのです。神は、イエス様がこう祈られるのを最も喜ばれることでしょう、「神よ、あなたの目的は、世界の救済ですね。あなたのみ旨を成就するための犠牲として、どうか私と私のクリスチャンの兄弟姉妹たちをお使いください」と。真のクリスチャンとは、世界救済のための神のみ旨を成就するために、自分自身と、自分の教会、そして教派を喜んで犠牲にする人たちのことです。

2000年のキリスト教の歴史を見るならば、何百万人ものクリスチャンたちが、神に、深く無私の祈りをささげてきたことが分かります。初代キリスト教において、広く行われていた祈祷とは、何であったか知っていますか？　彼らは絶えず、「主よ、どうぞ、あなたが約束されたごとくに、もう一度、あなたの息子を送ってください」と、神に嘆願していたのです。それは、現在多くの人々が祈っている祈りの種類とは、大変違っており、彼らは「主よ、どうぞ私の家庭が繁栄するよう助けてください、私の教会を祝福してください」などと祈っているのです。

本当のクリスチャンは、神の援助や、自分の家族だけの恩恵を求めて祈ることはできないのです。自分自身の神の恩恵だけを祈り求める人々は、天国には至らないでしょう。神の真実の事情を知ったのちには、私たちは、このようにしか祈ることができないのです、「神よ、私は喜んであなたの犠牲になります。私を、あなたの道具としてお使いください。私を通して、世界救済のためのあなたのみ旨を成就してください」と。このような人たちが、神の国を築くのです。

最初のクリスマスの現実

イエス様の心情をよりよく知るために、最初のクリスマスのイエス様の事情を思い起こしてみましょう。今日、キリストの誕生を、お祝いや喜びをもって祭っている教会が非常にたくさんあります。伝統的態度として、メシヤが馬小屋で生まれ、わらの上の飼い葉桶の中に寝かせられていたということに対して、今まである種の称賛がありました。しかし、

人類はどうして、神の子が馬小屋の中で生まれたことを誇ることができるのでしょうか？

ユダヤ民族は、イエス様を受け入れ、援助するよう神によって準備されていましたが、しかし人々は、イエス様がだれであるのか、また、イエス様が神のみ旨を成就するために、彼らが何をすべきかについて、ほんの少しでも本当に考えたでしょうか？　彼らは、何も知らなかったのです。個人としてのイエス様の使命、家庭や家庭を囲む国家、そして最終的には世界全体を復帰するというイエス様の使命を理解した人がいたでしょうか？　イエス様が使命を果たすことに援助した人は、世俗世界にも宗教世界にも、全くいなかったということは非常に明白です。

もしも、イエス様を理解し、イエス様を援助した者がだれかいるとすれば、それは神御自身でした。神は御存じであられたのですが、イエス様以外のだれもイエス様の責任というものを理解していませんでした。神は、御自身の息子が馬小屋で生まれ、寒中泣き叫び、何をしたらよいのか知る人が周りにだれもいない中で、そしてサタンが一心にイエス様を阻止する道を探し求めているのを御覧になって、神は満足し幸せだったでしょうか？　そのような状況の中で、神は安閑としていられたでしょうか？

実際の状況が、いったいどのようなものであったのかについて、もう少し詳しく振り返って考えてみましょう。マリヤは、イエス様の母親でしたが、しかしヨセフは、イエス様の父親ではありませんでした。ヨセフがマリヤと結婚したとき、マリヤは妊娠しており、ヨセフは、マリヤのはらんでいる子供が自分の子供でないことを知っていました。ヨセフは、一つの短い夢の中で告げられたこと以外は、何も知りませんでした。ヨセフは、正しい人であったので、天使に指示されたようにマリヤと結婚しましたが、ヨセフがそのことについて、どのくらいの間、正しいことだと喜んでいることができたと思いますか？　皆さんはヨセフが、「それは、だれの子か？」といぶかり、繰り返し尋ね続けたと思いませんか？　マリヤが、「まあ、この子は聖霊によって、身ごもったのですよ。ですから、あなたは喜ぶべきです」と、ただ無頓着に答えることができたでしょうか？　たとえ、マリヤがそのように正直に言ったとしても、ヨセフが喜んで対応したと思いますか？

現実的になって、そのような立場に自分を置いてみてください。だれ

もが、皆さんをとても寛大な人として尊敬するでしょうが、しかし皆さんは、だれか他人の子供を身ごもっているある女性と結婚しなければならないのです。その女性が皆さんに、それは聖霊によって身ごもったのですと言ったとするならば、おそらく一日くらいは憤慨しないでしょうが、その後ずっと寛大でいられるでしょうか？　皆さんのうちの一人がヨセフの立場にあったとして、周りのうわさや批判を聞いて、とても幸せで、マリヤに満足していられるでしょうか？　子供が生まれたなら、喜んでその子に仕え、悪からその子を守るために喜んで犠牲になれるでしょうか？

ヨセフは、知りたかったし、理解しようとしたので、マリヤがだれの子供をはらんでいるのかを、おそらく何度もマリヤに尋ねたことでしょう。しかし、当時、結婚していない女性が妊娠したならば、モーセの律法によって姦淫を犯したとして、石打ちの刑に処されるようになっていたことを思い出してください。最初、おそらくヨセフは理解しようと思ったことでしょうが、しかし、長くはそのような状況を、受け入れることができなかったのです。皆さんは、彼らに幸せな関係が、大変長く続いたと思いますか？　おそらく、彼らは愛の中で完全に理解し合い、協力し合ったというよりも、喧嘩をし、お互いを不信し合ったことでしょう。

一たびイエス様が生まれると、二人の間の亀裂はきっとさらに大きくなり、ヨセフはイエス様を、何か望まれない、またマリヤとの関係を破壊するものとして見下したことでしょう。人間の性質の現実から判断して、このことは、おそらくイエス様の生涯を通じて存在していた状況であったのです。両親がイエス様に対する態度のゆえに、イエス様の兄弟や姉妹までもがイエス様を尊敬しなかったでしょうし、ましてや、イエス様が神の子であるとは思いもしなかったことでしょう。マリヤとヨセフは、イエス様が普通の子でなかったので、他の子供よりも悪い扱いさえしたことでしょう。

聖書には、マリヤとヨセフが過越の祭のために、イエス様をエルサレムに連れていき、そして町を出発する時、彼らはイエス様が自分たちと一緒にいるかどうかを確かめることさえしなかったと、記録されています。丸一日旅したのちに、やっと彼らはイエス様がいないことに気がつ

いたのです。普通の家庭においてさえも、両親が、イエス様と同じ年齢の子供を、人込みの町の中にたった一人で取り残すことなど、皆さんは想像できるでしょうか？

私たちは、マリヤとヨセフがこのことについて、口論していたと憶測しても差し支えないと思います。ヨセフは、「あの子のことは忘れなさい。さあ、ほうっておこう」と言ったかもしれず、そしてマリヤは、一緒についていかなければなりませんでした。しかし、マリヤは強要し、ヨセフはマリヤが譲らないことを知っていたので、二人はイエス様を見つけ、彼らと一緒に家に連れて帰るために再び戻ったのです。

マリヤが妊娠して、マリヤとヨセフの間がうまくいっていなかった間に、どのように二人がしばしば争っているかについて、うわさが近所中に広まっていったと思いませんか？　古いユダヤの村のように固まって住んでいる近所においては、だれもが、マリヤとヨセフが何らかの理由でうまくいっていないことを知っていた可能性があるのです。少なくとも、位の高い祭司であったザカリヤや親戚のすべてがその事情を知って、その状況を悪く思っていたのです。

ヨセフの家族は、イエス様が本当は自分たちの家族の一員ではないことを知っていたので、たとえ彼らがイエス様の前でそのことを話さなかったにせよ、イエス様は尊敬されていませんでした。アメリカのような寛大な社会において、今日でさえも、父親の分からない子供をもっている少女がいたとするならば、それについて、何らかのうわさが立ちます。もっと厳しい状況が、イエス様の時代に広まったのです。当時、未婚の母は、死をもって罰せられたのです。きっと、残酷なうわさがあったことでしょう。このような状況の中で、イエス様は普通の子供のように、幸福で満足に成長することができたでしょうか、あるいはまた皆さんは、イエス様が耐えられない状況の中におられたということを想像できますか？　イエス様と遊んでいた子供はみな、きっと自分の両親から聞いたことについて話題にしたに違いありません。イエス様は、他の子供たちと普通の関係を結ぶことさえできなかったのです。

それにもかかわらず、イエス様は、すべての人々を救うために生まれたという事実が残っています。イエス様は神のひとり子であり、その救

いの対象は、正にイエス様を排斥する人々であったのです。王の王が、周りの人々によって虐待され、誤解された道は、イエス様に対する神の御理想とは、全く掛け離れたものだったのです。

どのような人がイエス様を慰めることができたのか？

イエス様の周りにいただれかが、イエス様を守ろうとしたでしょうか？　そのような献身的なことを記録する話は、一つもありません。イエス様は、家族によって虐待され、迫害されたのですが、それは、家族がイエス様が何者であるかを全く理解していなかったからです。たとえ王の王や神の子でなかったとしても、イエス様は、普通の子供と同じくらいだけでも良く扱われたでしょうか？

常識的に考えても、祭日や特別な時でさえ、だれも特別な服や贈り物を作って、イエス様に贈ったりしなかったでしょう。ヨセフにもっと気に入られている弟や妹たちは、何かもらったかもしれませんが、しかしマリヤでさえも、イエス様に何かあげることによって、ヨセフを怒らせたくないと思っていたのです。もちろんイエス様は、私たちがみなそうであるように、特別な服を着たかっただろうし、当時の特別な食べ物を食べたかったに違いありませんが、しかしイエス様に何かあげる者はだれもいなかったでしょう。

イエス様は、自分が特別であるということをはっきりと知っておられました。イエス様は、周りの者が自分について思っていることを聞いておられましたが、イエス様の自分自身に対する見方は全く違っていました。幼少のころから、イエス様は自分自身の方法で率直に話すことは全くできませんでした。探すことのできた唯一の慰めは、神との対話であり、イエス様は、ほとんどの時間を神への祈りに費やし、神の指示を探し求めていました。その結果として、イエス様はこの期間にますます強靭になり、環境がイエス様を唯一の方向――神と神の理想の実現のみに向かわせたのです。イエス様は、人類の考えは神の考えからはるかに掛け離れていること、そして、それは正されなければならないことを知っておられました。イエス様はまた、社会が神の望まれていることを全く理解していないこと、そして、イエス様御自身がそれを変えなければな

らないことを知っておられたのです。イエス様は、その逆境のゆえに、神がイエス様に語りかけ、イエス様の将来の仕事のために何が必要であるのかを教えることができる境地に至るまで、神に向かって強烈に祈られたのです。

このような状況のもとで、イエス様の生前に、その誕生日をだれか本当に喜んで祝ったと思いますか？　イエス様が成長し、ますますはっきりと神がどういうお方であり、イエス様御自身の使命がどのようなものであるかを知るにつれて、イエス様の心はますます重く、ますます苦しくなっていき、その環境はますます扱い難いものになっていったのです。

イエス様にとって最も貴重な友人とは、彼のところにやって来て、たくさんの贈り物や祝いの言葉を贈る人ではなく、涙にぬれた心情でイエス様の立場を慰め、イエス様が将来何をしようとしているのかをイエス様と共に話し合う人だったのです。もしこのようなだれかがそこにいたならば、贈り物を持ってくる人がいるより、イエス様はずっと幸せであったことでしょう。その人は、イエス様御自身の弟や妹たちの一人であり得たかもしれません。イエス様の隠された苦しみを知れば、弟か妹がイエス様の誕生日に、ハンカチに包んだ一切れの小さなケーキを持ってきて、「人々は理解しないでしょうが、私はあなたを助けましょう。ですから、がっかりしないでください」と言うことができたでしょう。きっとイエス様は、すてきな贈り物を持ってきながら去っていく人よりも、このような人をはるかに歓迎されたことでしょう。このような弟や妹が家族の中に一人でもいたとするならば、イエス様は長い間その人のことを忘れないで、そのことについて話されたことでしょう。

イエス様は落胆したとき、もっと集中して神に祈らなければならなかったのであり、イエス様の熱心な祈祷によって、神は感動し、イエス様に「のちに、あなたはこのように偉大になり、そしてこのような特別な位置に上げられるでしょう」と教えられたのです。そのようにして、神はイエス様に多くのことを詳しく教えられるようになったと考えられる

のです。このような経験のゆえに、ヨセフやマリヤ、あるいは自分の弟や妹たちとは全く違って、神が御自分の最良の友であり、最も親しい方であることを、イエス様は知っておられたのです。

イエス様は、当時の国家的状況を思うと大変深刻で、事態をどのように変革すべきかを祈られました。イエス様は、御自身やイスラエル民族、そして全人類に対する神の御計画が何であるのかを知っておられました。神は霊的存在ですが、肉体をもつことによってイエス様は、世界の現実の状況を理解することができ、そしてイエス様は、御自分がその世界を神のもとに帰すための中心点にならなければならないことを知っておられました。皆さんは、イエス様が、いくらかでも理解を示してくれる人をとても必要としていたと思いますか、あるいはイエス様は、御自分がいなければ、だれも神のもとに帰ることはできないということを知っていながら、自分に愛のある一言でも話しかけてくれるのを聞きたいと思っておられたと思いますか？　イエス様は、高位の聖職者が、「神のもとに私たちが帰るための唯一の道なので、私たちはあなたを受け入れるための準備をしなければなりません」と言うのを、切実に聞きたかったのです。

こういうことを理解し、述べた人を、私たちは知っているでしょうか？　最後まで、イスラエル民族はイエス様を理解せず、その結果として、イエス様は十字架にかけられたのです。イエス様は、十字架上で亡くなったとき、筆舌に尽くし難いほどに失意のどん底にいました。人々の無理解によって、イエス様は完全に絶体絶命の境地に陥れられたのです。しかし神は、地上からイエス様を失うこと、そしてメシヤを送るために、再び何千年もの間準備しなければならないことを、どのように感じられたのでしょうか？

イエス様が、十字架上で苦悶のどん底にあったとき、神の御心情は全くイエス様の御心情と一致していたのです。そこには何らの違いもあり得なかったでしょう。皆さんは、本当に憤慨し、内面、完全に激怒している時に、幸福や恵みを与えることについて、考えることだけでもできるでしょうか？　そのような時にだれかがそばに来ても、皆さんは寛大で、心を開いていることができるでしょうか？　これが、正に、神が御自分の息子が十字架上で死ぬのを見ておられた時に感じられた心情なのです。

このようなことを理解すれば、イエス様は死ぬために来られたとキリスト教会が伝統的に信じていることによって、神がどんなに深く苦悶されているかが分かります。先に述べたように、神との親交をもたらしてくれるのは、生けるイエス様と私たちの関係なのです。このことゆえに、私たちの救いは、復活を通して、そして復活したイエス様との関係を通して来るのであり、十字架の血を通してもたらされるのではありません。しかし、復活でさえも、キリストの孤独な十字架によって受けた損害を埋め合わせることは、決してできなかったのです。神の最終的み旨は、神の選民が肉体をもったイエス様と一体となり、地上天国を完成するためにイエス様と共に行くことを必要としていたのです。イエス様の死によって、世界救済の摂理が阻まれ、再臨が必要となったのです。

このような絶望的な状況の中で、イエス様は、起こったことの意味を悟り、「私は、また来る」と言われたのです。イエス様が楽な方法で雲に乗って再びやって来て、世界を魔法で復帰することは不可能であるということを、皆さんはもう理解できるでしょうか？　何百万もの人々がイエス様の誕生日に、讃美歌を歌い、贈り物を交換して、お互いの幸運を願うとき、イエス様は喜びでいっぱいで、幸せでしょうか？　御自分の民を愛する一方で、御自分の使命のその部分の失敗についての痛々しい記憶は、イエス様の心の中に深く残ったままなのですが、その使命は、もし人々がイエス様を地上にいる間に受け入れ、慰めていたときにのみ果たすことができたのです。

クリスマスの真の祝い

イエス様の事情と、イエス様が何をすることになっていたのかを理解して、本当の意味でイエス様の誕生日を祝うことのできる人がいるでしょうか？　他の人がみなそうするので、自分もクリスマスを祝うという人たちが何百万人もいます。しかし、だれがイエス様の事情を知って、その日を記念するというのでしょうか？　イエス様にとって意味をもつであろう唯一の祝いは、イエス様よりももっと苦悩し、イエス様御自身

以上に失意にある人がイエス様のもとに来て、「私は、とても困難な状況にありますが、あなたの事情はもっと難しい状態です。私はそれでも、あなたの誕生日をお祝いしたいと思います。しばらくの間、あなたの悲しみを忘れてください」と、言う時でしょう。イエス様がそのようなクリスチャンを見るならば、どっと泣き崩れ、ほんのしばらくの間、御自分の誕生日を祝われることでしょう。

この講堂には、多くの人々がいますが、皆さんはどのような人々で、何をすることになっているのでしょうか？　私たちは、イエス様の名前を使うことによって多くの良きことを得るのでしょうか、それとも私たちは、イエス様を助けるのでしょうか？　神は、この教会が何をするように意図されたのでしょうか？　自分自身を犠牲にする目的は、何でしょうか？　犠牲になることによって、私たちは、イエス様が求められた理想を成就し、すべての人に一体化をもたらすべきなのです。

イエス様の時代に、人々はイエス様を理解しませんでしたが、しかし今日、だれでもこのような心情の領域を理解することができるのです。もしだれか最も低い僕（しもべ）の立場にある人がイエス様を慰めるために来て、イエス様と語ったならば、イエス様は当時の力のあるどの人よりも、彼に親しみを感じたことでしょう。その人の心情は、イエス様の心情により近かったので、その人は、他のあらゆる意味においても近かったでしょう。その人がイエス様と同じような高貴な立場にいないからといって、イエス様はその人が来るのを拒まれることなどされなかったでしょうし、イエス様は、その人を正にその場で抱き、泣き崩れたことでしょう。それは、どんな国家的、社会的障壁をも超越する価値基準であり、永遠に人々をつなぐことのできる心情世界なのです。

人々は、ステーキやおいしい食事を食べながら、豪華な晩餐会のテーブルにただ座ることによって、完全なる一体感を感じることができるでしょうか？　キリストと共に心からの一体感を実現できるのは、むしろ、だれもが共に涙を流す、本当に惨めな状況の中でなのです。皆さんはなぜ、後者の境遇をより好むのでしょうか？　皆さんが苦労するのが好きだからではなく、イエス様がそう感じられ、神がそう感じられるから、皆さんはそのように感じるのです。だれもがこのようなことをしなければならない唯一の理由は、皆さんのために、神が所有するすべてのこと

を分かち合うためなのです。

このことは、私にとっても真実なのです。人々は、他の多くのことを好むでしょうが、しかし、たとえ家族と疎遠になるとしても、社会が受け入れる準備がないとしても、あるいは世界が理解しなくとも、私たちは、イエス様に従う人々のために神が開いた、その道をあきらめることはできないのです。それがいかに難しいとしてもです。これが、なぜ私が現在こういうことをやっているかの理由です。私がここにいる唯一の目的は、皆さんに神御自身と同じ道を正確に行ってほしいということなのです。皆さんは、それに同意しますか？　時には、それは大変難しいのですが、これが、イエス様の友となり、神御自身の友となる唯一の確実な道なのです。

私たちは、イエス様が選択された道を選び、そのようにして、神の友愛を理解し、参画することができるのです。もし女性がイエス様に従うつもりならば、マリヤの心情を携えて従い、可能な限り最良のマリヤになる努力をすることによって、2000年前のその事情を解放することができるのです。もしそれが男性ならば、ヨセフの立場でキリストに侍る努力をすべきです。またある人がキリストに従うには、イエス様を完全に理解し、愛し、イエス様のために最も困難なことをしてあげるように意図されていたイエス様御自身の兄弟姉妹のように従うこともできるでしょう。こうすることによって、またイエス様と一つになることによって、イエス様と神御自身は、将来決して、「私はあなたを知らない」と言うことはできないでしょう。真実の友としてキリストに従う人々は、この世のいばらの道を越えて、イエス様になされたすべての不正に対して激しい怒りを感じながらイエス様を慰めることができるのです。このような人々は、「彼らは、分からないのです。彼らの過ちを私が償いますので、彼らを責めたり、その事情に苦しんだりしないでください。そのことを忘れようとしてください、そして共にそれをなしましょう」と言うことができるのです。もし、メシヤがこのような弟子たちをもっていたならば、明らかに神が降臨され、残りの摂理を展開することができたでしょう。もしだれかがイエス様のもとに来て、彼の困難な状況を悲しんでいることを伝えるならば、「さあ、それは難しいですね。しかし、私はそれ

に耐えることができます。でもあなたはどうですか？　あなたの道は、もっと難しいですね」と、イエス様は答えられるでしょう。このような心情の流れが、地上天国の基台なのです。

世界は、最高の方法でクリスマスを祝っていますが、しかし私たちは、イエス様の本当の事情とイエス様の再臨の意味を理解し、私たちのすべての心情と愛を、神と愛において一体となるためにささげ、最も真実な意味においてクリスマスをお祝いしましょう。その時、私たちは、神に所属するすべてのものに参画する者となるのです。

私たちは、イエス様が地上におられた時、本当の誕生日をお祝いしたことが全くなかったことを思い起こさなければなりません。そして、真実の意味においてお祝いするために、多くの人々がここに集まっているのを見ることは、イエス様にとってとても意味深いことでしょう。皆さんは本当のクリスマスの祝いに参加できて、感謝ではありませんか？皆さんは、ここに集まった人々が顔に涙と汗の跡を残し、神の仕事をするために美しい服を着ないで出掛けるのを見て、イエス様が喜ばれるだろうと思いますか？　皆さんがここに集まってクリスマスの歌を歌い、イエス様の誕生日を祝うのを御覧になって、イエス様が深く感動されるだろうということに、皆さんは自信をもてますか？

皆さんは、神とイエス様でさえも、皆さんが行ってきたことに対して感謝できるような神の息子、娘になるための途上にあることを明確に知らなければなりません。そのような人たちは、この世界で最も美しい女性であり、最も偉大な男性なのです。神のみ旨が成就するまで、過去、現在、未来を抱きながら、残りの生涯をキリストの道の近くにとどまると決意した者たちは、両手を挙げなさい。神の祝福が皆さんの上にありますように。祈りましょう。